



TITLE:

一歐人の日本工業観

AUTHOR(S):

大塚, 一朗

CITATION:

大塚, 一朗. 一歐人の日本工業観. 経済論叢 1937, 45(5): 714-719

ISSUE DATE:

1937-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131019>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五卷 第五號

昭和二十年十一月一日發行

論叢

稅制整理の基調

經濟學博士

沙見三郎

失業と勞銀

文學博士

高田保馬

『民約論』に於ける共同體思想

經濟學博士

石川興二

時論

時局と水產業

經濟學博士

蜷川虎三

研究

ルーテルの「職業」について

經濟學士

澤崎堅造

チルゴの租稅論

經濟學士

島恭彦

エッヂワースと誤差の問題

經濟學士

馬場吉行

說苑

一歐人の日本工業觀

經濟學士

大塚一朗

チウネン圈の數學的説明

經濟學士

山岡亮一

資本移動と景氣變動の問題

經濟學士

松井清

カレツキ景氣循環論

經濟學士

飯田藤次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

説苑

一歐人の日本工業觀

大塚 一朗

一 序 言

大戰後、殊に最近數年來に於ける我國工業の目覺しき海外進出は周知の如くに極めて強く歐洲人の關心をそゝり立てた問題である。いふまでもなく此の日本工業の飛躍的發展は一方に於いて西歐經濟への壓迫といふ影響を伴つてゐた。それが原因で此の問題を繞る舊産業諸國內の論議は、動もすれば豫め或る成心を以てなされ従つて又屢々一定の偏見に陷るのを免れなかつた。ドクトル・ルプレヒトはかゝる事情に顧みて、事態の客觀的眞義を把握する爲にはしばらく西歐經濟對日本經濟の問題に關する日本人殊に指導的經濟人及び

新聞論說の見解に聽く必要ありと認め、さうした方法で此の問題を對象にした一つの描寫を試みてゐる。^{*}同じ問題を取扱つて從來から歐洲人間に普通に行はれて來た觀察とやゝ趣を異にしたところがある一歐洲人の日本工業觀として以下にそれを紹介しやうと思ふ。

二 工業の躍進に對する日本人の意氣

人が若し日本工業の躍進に對する指導階級日本人の言説を綜括的に檢討して見るならば、先づ第一に日本經濟躍進の背後にあるものはたゞに農業國の工業化といふことだけではなくて、更に他になほ一層意義深き或るものがそこに隠れてゐるとの結論に達せざるを得なからう。然るにこれまで多くの歐洲人は日本の經濟的發展が單に農業國の工業化といふこと以外のなにもでもないとして解し、従つてその發展も應て間もなく停止する一時の現象であると見てゐる。しかし、かゝる見解は誤謬である。日本の經濟的發展といふことの意味は結局人類の約三分の二を包括する東亞の天地から

^{*} Dr. Ruprecht, P., Der Kampf um den Absatz, in „Der praktische Betriebswirt, 17. Jahrg., Nr. 9, S. 761 ff.“

白色人種を永續的に驅逐するといふことに歸着しなければならぬもので、これを理解する爲に指導階級日本人の各種言論からこゝに引用することが出来る。たとへば、日本紡績業の指導者たる社長津田氏は『亞細亞は決して白人演劇の舞臺ではない』と説明してゐる。

又他の日本經濟指導者は和蘭の一大紡績業者に向つて次のやうに言明してゐる。即ち『箇々に見れば小さいけれども總體に併せれば巨大の額に達する東亞十億の人口の購買力、これを獨裁的に支配するといふことが日本の目標なのである。』かゝる言説の中に窺はれる性質の日本人の努力が、西歐經濟に對して如何に重大な意味を持つかといふことは、現今白人諸國民に對する日本人の精神的態度を見れば一層明白になる。近時日本の諸大新聞に英文を以て現はれた諸論説を編纂したものが伊太利で出版されてゐるが、それを讀むと右のことについて有益な示唆を受けることが出来る。

そこには色々なことが述べられてゐるが、其の中に日本は世界市場を分割する目的を以て歐洲工業國との

協商に入ることに對して甚だ氣乗薄である。それは協商によつて商戰を終結せしめ得るとは信じられないからである、といふことがいはれてゐる。商戰は今日迄も常に存在して來たし、今後も亦常に存在するであらう、といふのである。歐洲工業國との經濟鬭争に對する此の日本の覺悟といふものは、畢竟歐洲工業に對抗して日本が比較的廉價の商品を供給し得るとの確信に立脚してゐる。かゝる優越的信念が白色人種との經濟鬭争の問題に如何に日本人を氣負はしめてゐるかといふことは、次のやうな新聞論説からも窺知することが出来る。『現時吾等の商品は世界の凡有る港、凡有る國、遠きアフリカの諸地方から、歐洲、アメリカに至るまで到るところに充溢してゐる。日本製商品 (Made in Japan) は到らぬ限もなく顧客を呼んで廉價の故に賣られて行く。水が低きに向つて流れると同様、輸出商業は最も廉價な價格を以てする提供者の手に集中するものなのである。これは人間必要性の法則によつて然るのである。』而して、右にいはれる人間必要性の

法則なるものを日本人は次の事情によつて基礎づけてゐる。曰く『諸卿等英人及び一般歐洲人は卿等の高利潤及び卿等の國の勞働者の高き生活程度を追求しており、吾等は吾等の國の勞働者への勞働機會を準備することゝ、並びにアジア人、アフリカ人、南米諸國人及び國內顧客等々の生活上の必要といふこと、此の二つのことを考へてゐるのである。日本より右の諸國民に提供するところの物の價格が歐洲工業からの半額に當つてゐるのに、何故彼等は歐洲品を買はねばならぬのであらうか、』と。西歐諸國人は以上の諸言説に接して必ずや、自己の存在の基礎を脅す日本經濟の進出に對し何としても結束してこれに對抗せねばならぬとの確信に驅り立てられることであらう。しかし、それよりも先に第一に日本經濟の躍進が抑も何に起因するかを靜に考察するところがなければならぬ。

三 日本經濟躍進の根本原因

歐洲人は從來國際政治の問題でも又國際經濟の問題でもともすれば狹隘なる歐洲人的視野にとち籠つても

のを見て來た。蓋し、歐洲人は日本經濟による脅威の問題をたゞ『貨銀の問題』としてのみ觀察して來たのである。此の種の見解に對しては嘗て日本の大藏大臣高橋氏が或る公開の講演の中で次のやうに反駁してゐる。即ち、日本製輸出商品の廉價なる原因は經濟制度の好都合なるに因るのであつて、生活程度の低いことに基く生産費安にあるのでは決してない、といふのである。同様な言明を日本商工會議所會頭郷氏からも聞くことが出来る。彼は次の如く説明する。即ち、日本の貨銀水準は國內市場の水準から見て決して低くないといふのである。經濟制度の問題に對しては又先に舉げた津田氏が次のやうにいふてゐる。『統制經濟はたゞ舊産業國の悲鳴に他ならないものであつて、吾等には吾國の青年産業の爲に自由商業の道が必要なのである。此の際舊産業國の奴隸になつて統制經濟の高歌を放吟してはならぬのである。』

これら日本經濟指導者階級よりの統制經濟反對の見解に對しては歐洲人としてたゞ次のことだけを、いふ

ておかねばならぬ。即ち、歐洲人と雖も亦決して統制經濟が絶對的の意味で最善の制度であると考へてゐる譯ではないのである。畢竟それはたゞ必要の生んだ產物に過ぎないと見てゐるのであるから、こゝに統制經濟其のものについての原理的論争を試むべき餘地は存してゐない。しかし、吾等としてはこれに關聯して次のことだけは自ら明かに承知しておかなければならぬ。即ち、統制經濟は現に一定の利益を生むけれども其の利益は高價なる組織、高價なる原價の犠牲を以て購ひとられてゐるといふ點である。日本の大藏大臣高橋氏が自國商品の廉價の原因を其の經濟制度の特殊性の中に求めたのは蓋し右にいへるところと同じものに着眼した結果であらう。

又日本商品廉價の原因を日本の賃銀が歐洲のそれよりも低いといふことに基く低賃銀の中に端的に求めていつてはならぬといふ事柄につき日本紡績業の代表者岡田氏がロンドンで次の如く説明してゐる。

第一に、日本以外の他國に勞働者の榨取がないとい

ふなら、事情は日本でも同じである。勞働時間は工場法にて制限されてゐて決して屢々考へられるやうな長さにはなつてゐない。實際紡績業では一交代八時間半以上に出てはゐない。又日本紡績業に行はれてゐる報酬制度は諸外國のそれと異なる事情になつてゐて、勞働者の爲に利用される各種の福利施設は其の費用の半額を雇主が負擔してゐる。かくて日本勞働者の受ける支拂は寧ろ高位に屬してゐるといへる。

第二に、日本勞働者の生活狀態は歐洲勞働者のそれと比較して決して低級なのではない。日本の生活狀態は確に非常に廉價ではある。だからといつて享樂や満足の點で日本人の生活が歐米人のそれより貧弱であるとは見ては早計だ。氣候、風土、傳統等の關係で日本の生活樣式は歐米に於けるそれに對して特殊のものになつてゐる。そこに、日本では比較的廉價で生活上の満足を得られる原因がある。

第三に、日本では家族制度が行はれてゐてそれが日本

狹義の家族だけでなく屢々貧乏な親族に迄及んでそれが生活の安定を保たせるに貢献してゐる。失業問題が日本で窮迫性のものにならない原因がこゝにある。

總じて、日本經濟の特殊性を語る以上の判斷を見て、始めて人は日本人が彼等の飛躍的發展に對してなされる歐洲諸國民の防禦鬭争を前にして平靜確信の態度を失はずに着々豫定の目標に進んで行く所以を理解することが出来る。此の點について一日本新聞論説は參考になることをいつてゐる。曰く『凡有る産業の任務は國內國外の需要の爲に生産費低き商品をつくつてこれを廉價で顧客に賣るといふことにある。日本の産業は偏に此の目標を追求してゐるだけのことである。』と。かゝる道に沿ふて日本が進み行く限り日本經濟發展の背後には臆て少くとも東亞に於ける國際政治上の一新時代が又自ら伴つて起つて來るであらう。

四 結 言

右の諸所に引用されてゐる日本人諸氏の言説なるも

の眞偽は私に於いて別段に調査した譯ではなくたゞ原文を紹介したに過ぎないので、これは讀者の諒承を得たい。抑も私がこゝに此の紹介を試みた動機は、日本商品の廉價従つて日本工業躍進の問題につき原文筆者が從來通有の歐米人的態度を些か離れて單に日本の低賃銀といふことをとへての攻撃非難に終ることなく進んでなほ一層深きところに何等か別の眞原因を求めんとしてゐる態度の異色なるに興味を惹かれた點にある。たゞそこに於いて日本人の言説を資料として捉へられたところの所謂日本經濟發展の永續性といふことへの原因といふものに關して、大いに疑問がある。原文筆者が捉へたところの其の眞原因は結局次の二點に歸着する。第一點は、日本の經濟制度に於いては歐洲のそれに於けるよりも自由放任制が一層濃厚に現はれてゐるといふことである。第二點は、日本では生活樣式の特種性が根據になつて國民の生計が比較的廉價であり得ること、並びに福利施設が發達してゐること、これら二つの事情のお蔭で生活上の福利に惡影響を與へ

ずに比較的低賃銀が可能であるといふことである。

先づ經濟統制の發展が生産費割高の原因として把握されてゐるといふことは簡々の生産經濟に於ける經營經濟的立場からこれを見て、一應事態の真相を捉へてゐるといへるのである。しかし、經濟統制の發展は市場の狹化と資本集中の發展といふ二大原因から惹起される國民經濟内各種利害相剋の發展、世界經濟に於ける國民主義の激化、破壊的國內市場競争、國防經濟の擴大強化等々凡そ今日の各資本主義的國民經濟上に共通的に起つて來てゐる歴史的諸契機が相倚つてこれを必至ならしめてゐるのであつて、既に今日及び明日の日本經濟は此の點に於いて何等歐洲經濟と類を異にする特殊性を持つてゐる譯ではない。

次には先に擧げられた種々なる事情が基礎になつて日本では生活上の福利を毀損する弊害なしに比較的低賃銀が永續的に可能であるといふ點、これは或る程度迄所謂日本の特殊事態なるものを原理的に把握して肯綮に當つた見解であるといへないことはない。しかし、

だからといつて從來日本工業上各般の勞働政策が右に所謂特殊事態に藉口して過度に内外に於ける消費者利潤と並びに企業資本利潤との作出に偏傾し正しき意味の勞働力再生産を等閑にして來た跡が全然ないといへるであらうか。工業勞働力供給の地域的母胎たる農村公共費と更に各勞働者出身家族の共同生活費とに對する正當な負擔分を回避する賃銀政策、及び從業者健康への積極的顧慮乏しき勞働時間政策はたとへ一時的に國民に仕事の機會を與へることが出來ても、何時の日にかは農村疲弊、國民體位の惡化といふが如き形態を持つ反逆の刃をして國民經濟全體の生産力の根柢に對する破壊的作用を逞うせしめずにおかないのである。要之、日本經濟の永續的躍進を可能ならしむべき契機を求むれば私は原筆者と所見を同じくしない。科學の發達、有利なる生産資源利用の確保、勞働する者の體力熟練道德性の優越的實力、以上の三要件が實現出來る時に原筆者の恐れ且つ豫期する日本經濟發展の永續性が始めて其の可能を保證され得るのでなからうか。